

NETWORK

—地域の文化資源をさがす—

稲築町鴨生“山上憶良物語” 2
 筑豊のお菓子は新産業創造の成果 4
 民によるまちづくり —長野県小布施町— 5
 小布施町の観光とまちづくり出世物語 7
 地域づくりのための土地利用研究会 9

見・聞・食

“個族”と百貨店の食品売場 10
 スミわたる空の下、炭焼きの煙はくすぶる 11
 ごみ問題を考える④
 ごみ問題は「少子化問題」、「個族化問題」 12
 地域との交流を進める
 元ハンセン病患者の療養所菊池恵楓園 13

近況

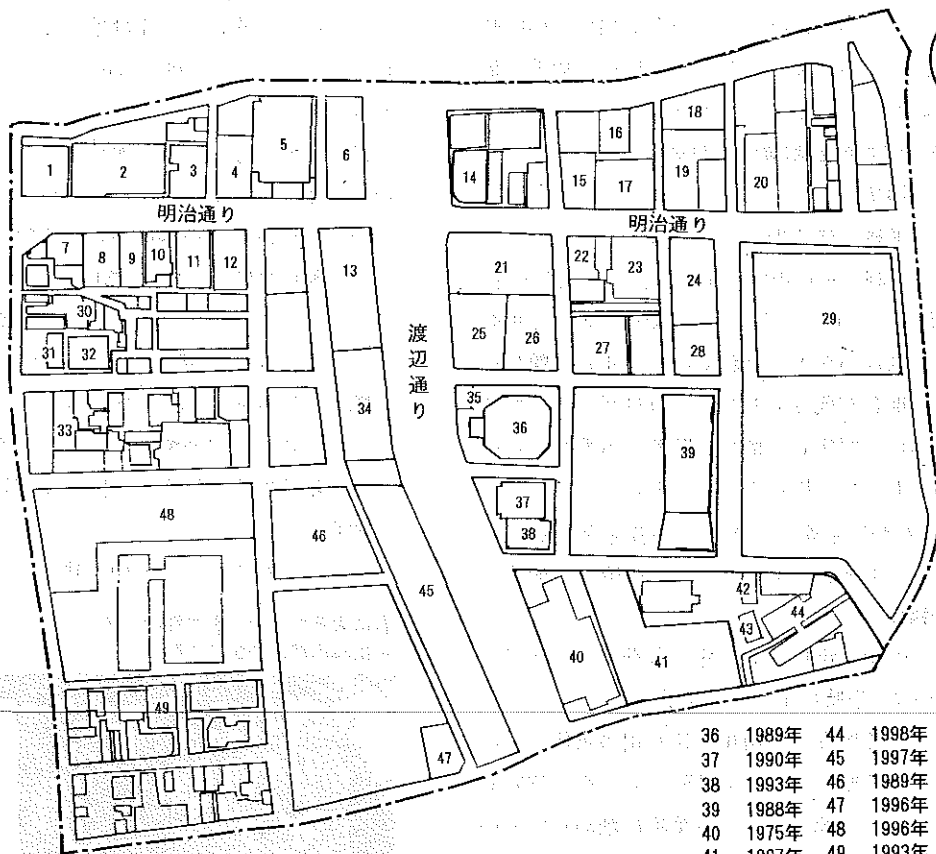
100歳の誕生日に思う 14
 わが祖母の最後の仕事 14

本・BOOKS

「高蔵寺ニュータウン夫婦物語」 15

◇ 竣工年度

- 1 1985年
- 2 1976年
- 3 1958年
- 4 1965年
- 5 1975年
- 6 1958年
- 7 1978年
- 8 1969年
- 9 1986年
- 10 1954年
- 11 1975年
- 12 1960年
- 13 1936年
- 14 1993年
- 15 1982年
- 16 1977年
- 17 1970年
- 18 1964年
- 19 1966年
- 20 1989年
- 21 1961年
- 22 1954年
- 23 1960年
- 24 1978年
- 25 1976年
- 26 1982年
- 27 1964年
- 28 1994年
- 29 1995年
- 30 1985年
- 31 1991年
- 32 1990年
- 33 1997年
- 34 1999年 予定
- 35 1996年



- 36 1989年
- 37 1990年
- 38 1993年
- 39 1988年
- 40 1975年
- 41 1997年
- 42 1997年
- 43 1997年
- 44 1998年 予定
- 45 1997年
- 46 1989年
- 47 1996年
- 48 1996年
- 49 1993年

福岡の元気は1970年代に始まっていた

図は天神1、2丁目の大型ビルの竣工年度を示したものです。

最近「福岡は元気がいい」といわれますが、これを見ると、元気がいいのは最近に始まった話ではないようです。また、この中で最も古い1936年竣工の岩田屋（百貨店、13）は例外としても、半分は1970年代前半までに建設されています。また、戦後の高度成長、バブルの時期が、かなり影響しているように思われます。（10頁参照）

—— 地域の文化資源をさがす ——

稲築町鴨生 山上憶良物語

○稲築町鴨生の「史跡探訪ウォークラリー」に参加
嘉穂郡稲築町は、筑豊地域のほぼ中央、北側には飯塚市が隣接し、昭和20～30年代は炭鉱町として大いにぎわった町である。

私は、この稲築町では住宅関係の仕事のお手伝いを7～8年間させていただいているが、振り返ってみると町の歴史のことについては、あまり知らないことに気づいた。

そこで去る3月中旬の日曜日に稲築町生涯学習ボランティア「あすなろ会」の主催による「ふるさとの昔を訪ねて」という稲築町鴨生周辺の文化史跡を歩き訪ねる会に参加させていただいた。この会で初めて稲築町鴨生と山上憶良との関係、また、山上憶良の歌碑に係わる色々ないきさつを知ることとなった。

○鴨生周辺に残る条里制遺構の地名

鴨生周辺の地積図には、中の坪、縄手頭、三十六などの条里制に遺構を残す地名が今も残っているとのことである。条里制の一坪周囲を東方面は「東縄本」、西方面は「西縄本」と呼ぶらしく、「縄手頭」という地名はその名残ではないかと言われている。また、鴨生には大倉という地名が残っており、これは鎌倉倉（大和朝廷の直轄領から収穫した稲米を貯蓄する倉）がこの地にあったであろうと推定されている。

○「銀（しろかね）も金（くがね）も玉も何せむに
勝れる宝子にしかめやも」をはじめ嘉摩郡三部作
を鴨生で撰定

文献によると山上憶良は726年に筑前国守（今で言うところと県知事の役、当時67歳）として太宰府に来ている。この国守の時に嘉摩郡（山田川・遠賀川の東側一帯の地域を示す）を巡察した折、郡役所に立ち寄り撰定したのが、後に嘉摩三部作という万葉集に納められている歌である。この郡役所があったのが鴨生であったであろうというのが定説となっている。

この嘉摩三部作は撰定とあるので、憶良が既に手がけていた歌を郡役所で筆を加え、仕上げたのであろうと言われている。私は憶良の歌の中で最も親しまれている歌が稲築町鴨生で撰定されたことに驚くとともに、憶良と鴨生との関係を知った金丸与志郎氏の憶良への

思いが桑原武夫先生（京都大学名誉教授）や万葉集の大家である犬養孝先生（大阪大学名誉教授）など著名な文学者を鴨生の地へ呼び寄せていることに驚かされた。

○地元の元校長先生の思いは今の娘さんに引き継がれている

著名な先生方をこの地へ呼び寄せたいきさつや憶良のことをどうしても知りたくなり、志を引き継いだ娘さん宅を訪ねた。約束の時間に着くと、今はご高齢である嘉与子さんが直ぐに出てこられ、いろいろとお話をうかがうことができた。最初は1時間ほどのつもりであったのが、嘉代子さんは憶良のことになると時間が止まるらしく（これは本人の弁）、約2時間近くの聴講を受けることとなった。

話は少し長くなるが、鴨生憶良物語のいきさつについて、今回、嘉与子さんからうかがったことと併せて、以前に書かれた講演録の中から抜粋する。

- ・与志郎氏は昭和32年に桑原武夫先生編集の「一日一言」という本の中に憶良の「子等を思う歌」が掲載されており、この歌の紹介の記事で小さく「飯塚市外鴨生」と書かれていたのを知る。
- ・与志郎氏は、早速桑原先生に手紙を出し、問い合わせ、稲築鴨生と憶良との関係が間違いないことを確認する。
- ・その後、鴨生の地に歌碑を建てることを誓い、関係

右は犬養先生の命名で揮毫の碑
左は与志郎氏の短歌の歌碑



かる)のみで、歌碑の位置がなく、歌碑を訪ねてくる人は裏側にある犬養先生揮毫の2首は見落としていくとのことであった。

「地元の人は見慣れているのか、価値がわからないせいなのか、貴重な地域資源を見過ごしている」と良く言われるが、町はこの全国区レベルの物語を町民一人ひとりに伝え、憶良の歌を、その心に響かせるようにしてはどうだろうか。

最後に金丸与志郎氏が、憶良が筑前に赴任し、ふるさを思い詠った短歌や奈良地方と筑紫地方との地図から思い描いて作成した相似図は興味深い。

(山田 龍雄)

筑豊のお菓子は新産業創造の成果

昨年、飯塚市の新産業づくりのお手伝いをしていましたが、飯塚市にある2つの大学の資源(学生、研究シーズ)を活用して、地域に新しい産業の芽を創ろうというもので、新産業創造を推進するための地域システムづくりがテーマでした。

○大学はできたけど

3年前、1995年11月のよかネットの飯塚市、直方市、田川市の「筑豊3都物語」の中で、大学が立地するというのは、単に人口だけでみれば、確かに大きな効果がありますが、その後の定着環境づくりが重要であることは間違いなしということを書きました。

大学の立地効果というのは、短期的な人口増加だけでなく、地域資源としてもっと地域の活性化に役立てる必要があります。しかし、九州工業大学情報工学部が立地して10年経ちますが、今でも、飯塚市の2つの

4年生大学(もう一つは近畿大学九州工学部)の学生は4年経てば出て行くだけで、この4年間は大学とアパートとの往復だけという実態であり、卒業後、飯塚市内に残るのは1割に満たないという状況でした。

○砂糖の道から炭坑の町へ

ところで、ご存じの人も多いと思いますが、飯塚、筑豊地域には全国的に有名なお菓子があり、東京銘菓と間違われるものもあるようです。今風の言い方をすれば、ベンチャー企業といってもおかしく無いと思います。その有名なお菓子屋さんについて少し調べました。飯塚には「千鳥屋」「ひよ子」「さかえ屋」、田川「松尾製菓」、直方「成金饅頭」「もち吉」などのメーカーがありますが、このうち佐賀出身のお菓子屋さんは千鳥屋さんで、佐賀出身はこの他にも江崎グリコ、森永製菓などがあると聞いてます。

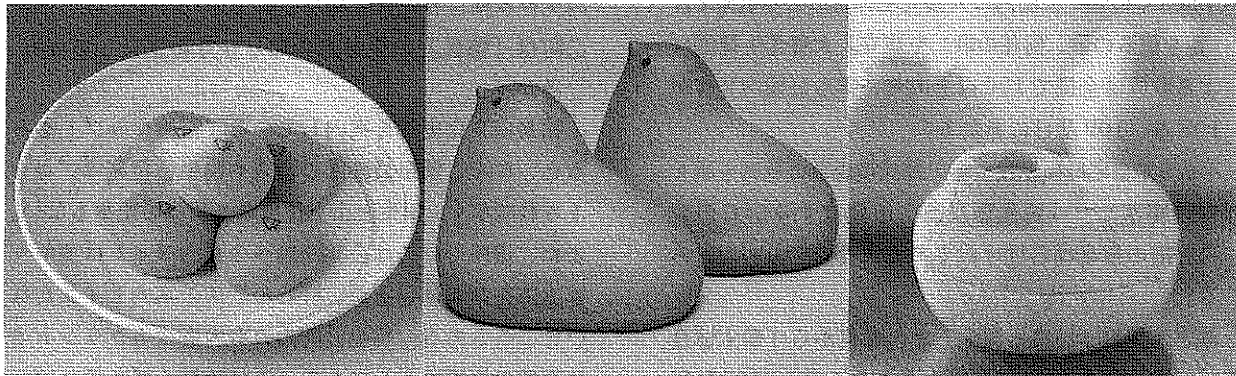
こんなことを書いているのは、佐賀の菓子屋であった千鳥屋さんが、今は飯塚の銘菓として全国的に知られていることに興味を持ったからです。肥前の国佐賀には、長崎と全国をつないでいた長崎街道があり、南蛮の焼き菓子(カステラ、丸ポーロ)の技術が伝わるなど「砂糖の道」と言われています。千鳥屋さんも、もともとは、今の佐賀県久保田町の街道筋で、酒饅頭を製造する老舗の菓子屋だったそうです。その千鳥さんがなぜ飯塚で商売を始めたのか、その理由を知るために、千鳥さんに聞いてみました。

○有田焼でマーケティングリサーチ?

千鳥屋の歴史は、先代の社長である故原田つゆさんの語りをもとに書かれた本「饅頭のおんこ」に詳しく述べられていますが、お店で聞いた話を含めて紹介したいと思います。

佐賀の久保田村の長崎街道筋で、酒饅頭などを作っ

左より千鳥饅頭、ひよ子、すくのかめ(資料:写真はいずれも「筑豊原色図鑑」より)



ていた菓子屋（松月堂）の長男として初代社長の原田政雄氏は生まれています。

もともとこの原田家は佐賀の龍造寺家の家臣で、内職に酒饅頭などを作っていたそうです。しかし政雄氏は、いずれ一旗揚げたいという欲求があり、これは昔から行われていた若衆の集まり「三夜待（みやまち）」での「荒野を目指す」青年たちの共通の思いだったようですが、当時の炭坑景気に沸く飯塚や大牟田、造船の佐世保、商業の博多などのどこがこれから発展するか、かれらが自分の目で確かめることとなりました。

どこが発展するかというマーケティングリサーチのターゲットとして、政雄氏は、当時の佐賀の全国的な物産である「有田焼」を抱えて飯塚へ馬車で出かけました。この飯塚での有田焼の売れ行き、炭坑の人たちのお金の使いぶりの良さに感激した政雄氏は、この時に飯塚に出店する意志を固めたようです。それから10年近い歳月を経て、昭和2年によく「松月堂」の千鳥屋が飯塚に開店します。政雄氏27才の時です。

松月堂では、既に焼き菓子の製造技術を持っており、「カステラ饅頭」として売っていたものを「千鳥饅頭」として大々的に売り出されました。この製造技術は、秘伝といわれ、2代目社長のつゆさんもご主人から教えてもらえなかったと書かれてるように、今でも千鳥饅頭の製造技術は秘伝だそうです。ただし、大量に作らなければならない現在、全てを手作りという訳にもいかないので、機械にある程度頼らざるを得ませんが、原材料の調合方法のような部分が、その秘伝と言われるところのようです。

○社会の需要増による成長から新たな需要の創出へ
大正元年、ひよ子を形どった「ひよ子饅頭」は、飯塚八木山出身の石坂茂氏の考案で生まれ、お菓子が持つかわいさによって世間に受け入れられました。

また、戦後の昭和32年、須久式土器にヒントを得た「すくのかめ」は、さかえ屋創業者の中野辰弥氏によって生まれ、先行する千鳥屋、ひよ子とは違う商品として売られています。

いずれも、創業時は筑豊の石炭景気を背景として、戦後の団塊の世代の成長とお菓子の需要増を捉えて業績を伸ばしてきたといえると思います。しかし、子供が減少する時代、健康志向、少人数世帯化という世の中

の変化は、高級進物菓子路線、かわいらしさと消費者参加を付加価値とするお菓子づくり路線、身近なお菓子屋づくりという路線など、それぞれが持つ特色をさらに強め、新しい商品を創出していくという方法で、今後も事業展開がされていくのでしょう。

甘いものが贅沢品と言われていた時代に欲しがられたお菓子が、今では健康に良い、体に良いものへとニーズも変わったと言われ、生活と密着したお菓子産業は、生活の中での先端的産業であり、激しい競争が行われています。

○知恵を学び、生かす

飯塚市には既にこういう新産業づくりの歴史的な動きがありました。そして今、大学に入学する若い人が減り、地元に残る若者もいない、このままでは大学も、地域も危機的状況になる、この飯塚において、新たな産業おこしを考えた場合、このお菓子産業の発展のプロセス、経営ノウハウは、まさに生きた教材であり、これらを学ぶことが必要であり、そういう情報の出会いの場が必要と思います。

そのため、地域の中で、歴史資源、産業資源、あるいは大学と産業界などが出会う場など、知的資源が相互にネットワークし、知恵を学びあい、生かしあいながら新しい産業づくりをやるしか無いと思います。

（山辺 真一）

民によるまちづくり

—長野県小布施町—

有田町観光基本構想の策定のお手伝いをさせていただいた関係で、長野県の小布施町を見学に行った。

「小布施町に関しては、「北斎館ができてから観光客が100万人に増えている。」とか「町全体が博物館になっている。」などの評判を耳にし、前から現地に行って、地元の人から話を聞きたいと思っていた。

今回、小布施町から第三セクターの㈱ア・ラ・小布施を紹介していただき、取締役事業部長の木下さんからお話を伺うことができた。

小布施町は長野市から長野電鉄で35分（約10km）の人口約12,000人の農業の町である。特に栗菓子の産地として有名で、福岡のデパートにも小布施の栗菓子が置いてある。木下さんの話によると、小布施町での栗菓子の生産額は90億円程度で、これは小布施町の全産



入館者数年40万人といわれている北斎館

業の総生産額300億円、うち農業（農産加工品を含む）が180億円で、その半分を占めているとこのことだった。また、栗菓子は地元で売られているのが約5%で、その他は東京や大阪などの大消費地のデパートに出ているということであった。

木下さんからは、小布施町が観光の町として全国に知れ渡るきっかけになった北斎館の建設とその周辺の景観修繕事業について、また小布施の町づくりを行っている、㈱ア・ラ・小布施についての概要を話していただいた。以下にその概要を述べる。

○過疎の町脱出から北斎館建設まで

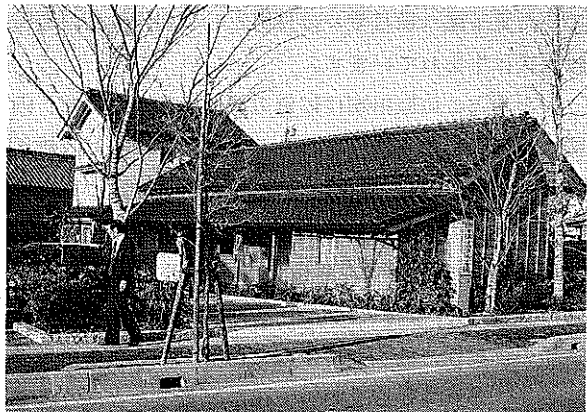
昭和40年代、小布施町は人口が9,000人ぐらいに落ち込んだ時期があった。その際、過疎対策として土地供給公社をつくり、200件の住宅団地を供給した。長野市から35分という地の利のよさで、宅地は完売し、収益もあった。そこで、昭和51年に5億円の剰余金をもとに、北斎館が開設された。その後北斎館を訪れる人がだんだんと増えるようになった。

○住民による景観修繕事業

北斎館に観光客が増えるに従って、周辺の整備も進んだ。

北斎館に隣接している北西約1.6ヘクタール内に、栗菓子店、銀行、町の高井鴻山の屋敷、2件の民家があった。昭和57年に、その地区で景観修繕事業の計画の話合いが始まり、それから2年間の話し合いのもとに計画がつくれ、その後3年間で工事が行われた。総事業費8億円で一切補助金はない。行政は、一地主として、費用を案分負担しただけである。そのため、事業化するにあたって、よけいな制約がなく、そこに住む人、働く人を主役にした町並み修景が可能になった。

また、この事業でおもしろいところは、土地の売買



蔵を改装したプチホテル

がなく、すべては土地の交換または賃貸で行われた点である。そうしたことによって、2人の民家の地権者は先祖代々の土地を売らなくてすんだという安心感が得られ、法人が民家の地権者に対し、少し高めの地代を払うことで、個人がこの事業に参加しやすくなった。

今では、この北斎館周辺には、みやげ店、栗菓子店が経営している飲食店、民間の美術館などが建ち並び、小布施町全体が博物館といった雰囲気になりかけている。

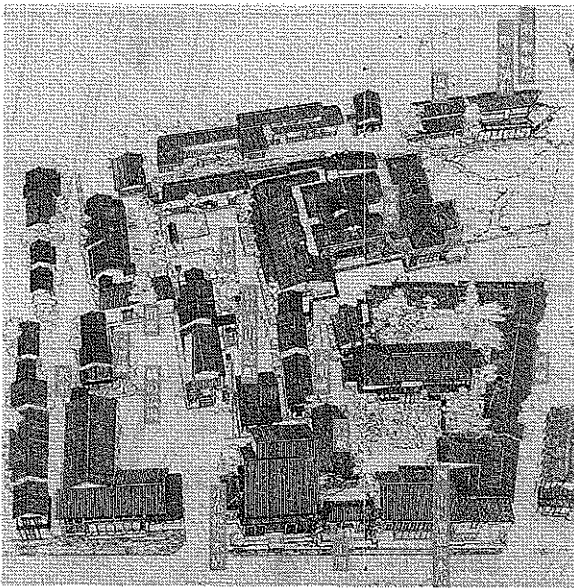
○民の工夫のもとに運営されている

第3セクター（㈱ア・ラ・小布施）

私たちが宿泊したのは偶然（とはいっても小布施には2件しか宿泊施設がない）㈱ア・ラ・小布施が経営しているプチホテルであった。このホテルはB&B（朝食と宿泊のみ）方式の蔵を改造したもので、客室が4室の小規模なものであった。

この宿泊施設の特徴は、夜に従業員がいなくても管理できる体制にしたり、朝食は隣接するガイドセンター併設の喫茶店でとれるようにしたりと、経費をおさえる工夫をしている点である。また、ホテルの建設費を確保する時点でも工夫がされている。宿泊券をクーポン券として発行し、地元企業十数社に300万円で買い取ってもらっている。それによってホテル建設による赤字が最小限に抑えられた。

行政中心の第3セクターには、採算性を考えず、赤字経営のところが多いと聞く。しかし、㈱ア・ラ・小布施は、54名の住民（2,500万円）と町（100万円）の共同出資（行政の出資率はわずか4%）、従業員はすべて民間人（4人うち専任が1人）というように、行政は一出資者に過ぎず、採算性を意識した経営を行っている。



小布施堂界限図

は大きいことになる。

今回行ってみると、小布施町の観光は全国区になっていた。また、当時の私の予想が当たって、「小布施」というブランドも全国区になっていた。そのブランドを原動力として、小布施栗関連の菓子はもとより、リングジュースなども含めた、農業関連商品の全国展開が行われていた。

当時の私のレポートには、「北斎館を中心に、観光地としての界隈が形成されてきています」とか、「北斎館に隣接する菓子工場も化粧直しをはじめています」といった説明付きの写真がそえられている。

○都市再開発法によらない、素人っぽいけど、すばらしいまちづくり（再開発）ができていた

今回行ってみて、「形成されてきています」とか「化粧直し」と言っていたことの意味がわかった。

私が以前に行ったときは、進捗中だったのだが、その一角の再開発が、その後の町並み修景事業のモデルになっていた。

小布施堂界限図（小布施堂のパンフレットから引用させていただいた）をもとに、説明を加えることとする。この再開発は1.6ヘクタールで、民間4者（民家2戸、信用金庫、小布施堂）と町役場の間で、任意の話し合いによって行われた。

表通りにあった民家が東の方へ移動し、信用金庫は表通りに出て、小布施堂は表から東の端の北斎館の所まで使用することになっている。

再開発法を使っていないので、「権利変換」などとい



案内標示がきわめてよく整備されていた

うことはしていない。表通りの民家の人は、その土地を信用金庫や小布施堂に貸し、地代を受け取っている。この2戸は、この再開発による受益はないので、時価より「幾分高いが」というぐらいの地代設定をし、それで移築などのローンを払うようになっている。

この「話し合い型任意再開発」は、昭和57年から話し合いを始めて、工事全部が終わったのが62年頃（私の行った次の年）である。話し合いが2年、工事が3年かかっているが、それは十分納得を得るためと、仮設住宅などつくりせずに、順繰りに工事をしていったからである。

この事業費は8億円、うち2.5億円は「栗の小径」という散策道を町役場が事業化した。役場からの助成金などはなく、全部自己資金（借入れも含めて）で自主的なものであったので、その後のまちづくりで、町役場に頼らない気風の見本となったということである。

（糸乗 貞喜）

地域づくりのための土地利用研究会

○地域のための土地利用を話し合う研究会をもとう

全国的に中心市街地活性化方策について取沙汰されているが、九州においてまちづくりを進めるにあたって、特に土地利用に関してどのような問題があるのか、また、地域にプラスになる土地利用の促進方策はないか、などについて検討し合う場を持つということになった。

そこで、都市開発を実際に手掛けているデベロッ

パー、ハウスメーカー、行政の方など十数名の方に呼びかけて、「地域づくりのための土地利用研究会」を発足し、昨年11月から今年3月までに3回にわたって議論する場がもたれた。

ここではその研究会で出された話について、取りまとめた。

○まず現状の問題が多く挙げられた

当初、研究会では現状の問題点が挙げられたが、関連する領域は、都市計画、農地、交通、商業等にまたがっている。その中でも、特に次の諸点についてもっと議論をふかめるべきだろうという意見が多くみられた。

○まちの成熟には時間を要する。出来上がりの瞬間だけ想定した都市計画では現実性がない。まちを徐々に作っていくようなやり方ができないか。

○地区計画で街区全体のまちの出来具合を見越して、容積率を適正配分することができないか。

○20~30年前に開発されたベッドタウンでは、地区の一体的な高齢化が進む。高齢者ケア施設、医療施設など福祉機能の立地ニーズが出るのではないか。

○農地の保水機能、遊水機能は必要である。開発需要があるというて全て農地を転用するのは問題だ。しかし現実には、都市周辺部では、もはや業態としての農業は潰れている地区は多い。

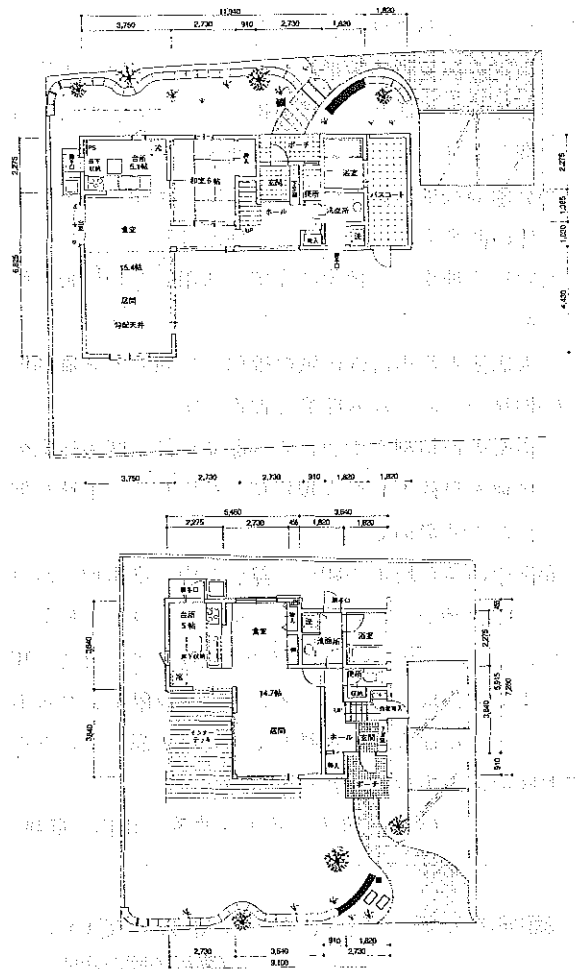
○郊外部に大型店が出店する場合、規模も大きく開発許可でやるケースが増えてきた。こうした開発が土地利用上良いのかどうか判断が難しい。

○中心市街地の活性化が取り沙汰されているが、人が行きたくなるような、賑わいを生む仕掛けがある。人の移動システムを含めた土地利用促進方策があるのではないか。

○人々のニーズを掴んだ開発が重要に

こうした問題点が挙げられる中、人々のニーズを的確に掘りおこした開発のケースも挙げられた。

一つの例としては、福岡地所株式会社が福岡県玄海町で行った開発「宗像コモン」が挙げられた。そこでは都市計画区域外での開発（開発面積23ha、166戸）であり、素地が安価であったため、一区画の宅地規模約65~100坪と広く、福岡や北九州への通勤時間が少し長くなってもこの広さがひとつの魅力となっているようだ。この中で、敷地の広い方から売れていったというのが面白い。100坪の方だと明らかに半分くらいが



上が余裕のある100坪の敷地、下がそれよりも少し狭い65坪。

芝生になっているが、65坪の宅地では、いっぱい建っているように感じる。

「いっそのこと、ほとんど造成工事をしないという考えはなかったのですか」と聞いてみたところ、「そこまでいくと、お客様が応えてくれるのが心配にもなり、ちょっとリスクーな感じがして、事業者としてはちょっと……」ということであった。それでも広いまとまった面積の緑地やオープンスペースがあって、それを共同管理することで、良好な居住環境を提供できるようにしている。しかし、事業者としてはかなりリスクーな開発だったとのことであったが、購入者は1次取得者が多く、20~30歳代で戸建て住宅を取得している人もみられ、安さと居住環境の良さへの追究という、人々のニーズに応えた開発の一つとみることができる。

○今後も研究を継続してフォロー

同研究会では様々な検討を行い、その結果、今後も継続して、研究を進めてはどうかということで、次の

ようなテーマが挙げられました。

- ①街区内の複数の敷地における一体的な設計手法
 - ・表通りと裏通りの条件の違うところで、それぞれ開発を進めやすくなる取り組み
 - ②公園や緑地の確保に伴う容積率の緩和など街区全体の開発方針を盛り込んだ地区計画
 - ③定期借地権と容積率の売買を活用した相続税の軽減
 - ④大店法と都市計画区域の線引きに対する評価制度
 - ⑤地域のためになる開発の促進方策
 - ・従来の連担型を中心とする開発、都市圏の住宅受け皿を目的とした大規模型のみでなく、地域振興になる開発のすすめ。
 - ⑥街中の急な坂道や駅から離れた中心市街地における、移動システムとしての交通インフラの検討
- なお、これらのテーマを取りまとめたレポートを、現在、当方で作成している。まとまった段階で、今後もテーマごとに研究会を継続してみたいと思っているので興味のある方は御一報を下さい。

(尾崎 正利、糸乗 貞喜、山田 龍雄)

福岡の元気は1970年代に始まっていた (表紙の図の説明)

表紙の図をみると、1960年代までの戦後の都市化の時期である高度成長期には、地場の大手企業、金融大手、大手企業が入っている事務所ビル(天神ビル、福岡ビル)の建設が行われています。これに、「所得倍增計画」や「列島改造論」の影響があった70年代前半までに建設されたビルをあわせると、図中に示したビルの内、だいたい5割程度が、明治通り沿いに集中して(図参照)、この時期に建設されています。

後にバブルといわれた80年代後半より、大型ビル建設のピークが南側へ移りながら再び訪れています。

県庁が他区へ移り、県庁跡に国際会議場や事務所、テナントが入ったアクロス福岡(29)が建設され、福岡市役所は一部を民間に売り渡し、そのお金も含めて、市役所新庁舎の建替費用としています。このピークは1992年のバブル崩壊の後、5年を経過した現在まで続いており、今のところ、福岡が元気がいいのは、バブル投資の延長といえるのかもしれない。

(澤谷 真紀子)

“個族”と百貨店の食品売場

福岡市天神地区では岩田屋Zサイド(1996年)、博多大丸東館(1997年)、福岡三越(1997年)が次々にオープンし「福岡は元気がいい」といわれる要因となっている。

各百貨店の動向について、地元誌などで取り上げられることも多いが、今回、よかネットNO.33では前号の表紙で取り上げた、百貨店の“個食”についてスポットを当て、“個族”と“個食”についての百貨店サイドの取り組みをみてみた。

○“弁当+個食”が定番の博多大丸

まず、エルガーラ(東館)のオープンにより、大きく増床した博多大丸に行ってみた。

行ったのは昼食時であったが、食料品が並べられている地下2階のフロアの中央に位置する、わずかに8.5坪の売場に、OLが押しかけて繁盛している。このスペースは店舗見取り図では「個料理屋」となっている。小さいスペースに、少し小ぶりの弁当(370円位)が常時17種類ほど並べられている。OL達は皆この棚の前に集まっており、目当てはどうやらこの弁当らしい。よく見ていると、弁当の他にも小ぶりのパックにサラダ、野菜煮つけなど一品ものの和洋中の惣菜を収めた“個食”という商品をプラスして買っている人が多い。

健康家の人はこれにプラスしておにぎりを付け加え、さらにデザートを食べたい人には、ゼリーやヨーグルトなども売っている。

買い物としては、“弁当+個食”ということになるが、ここでの“個食”の役割は、弁当の脇役だけれども、プラスαとして楽しく買われている。売場の人に聞いてみると惣菜では純和風のものが特に人気が高いということだ。

○若向けの店舗でも“一人用惣菜”には幅広い年齢層が集まる岩田屋

続いて、天神地区の老舗的な百貨店である岩田屋が、天神の中でも特に若者が多い地区にオープンさせた岩田屋Zサイド(1996年オープン)に行ってみた。

ここではベーカリーや小さいパックに入った和洋中の惣菜など、“一人用惣菜”が充実しており、これらの売場はフロア全体の1/5~1/4を占める。

昼は博多大丸と同じく若いOLが押しかけて繁盛して

いる。夕方になると40歳代の方が、食卓に並べる惣菜を求めて多く来店し、中には単身赴任であろうと思われる男性が毎日やって来て、“個食”とビールを求め、フロアの中程にあるテーブル（ここで買った商品を開けて、自由に食べることが出来る）で、おいしそうにビールを飲む姿もみられる。

Zーサイドの場合、衣類やアクセサリー、雑貨など全館を通して洋よった提案をしているが、“個食”の売れゆきだけは、洋より和の比重が高まっているという。

○“個食”についての捉え方はまちまちだが、とにかく売れている

これら2店の実態をみると、お昼どきと夕方では客層は違うものの、“個食”が極めて好調に売れている。2店の営業部門、食品部門の担当者の方お話を聞いてみた。博多大丸では“個食”についてみると、ターゲットは1番がシングルOL、2番目はシルバー世代、3番目は単身赴任サラリーマンとしており、ターゲットは単身者ようだ。しかし、実際は多様な層に受け入れられており、この8.5坪のフロアだけで、月の売上げは1,500万円となっている。また、ここの特徴は、弁当をまず手にとってプラス個食というスタイルにあり、弁当があるから個食が売れているということだ。

一方、岩田屋Zーサイドは、全館ではキャリア層の女性を主力ターゲットとしており、食料品売場においても「一人用惣菜」だけに絞って何かやってきたという訳ではなかったが、実態としては、年齢、性別の関係はなく、“一人用惣菜”は受け入れられているということだ。

○どんな世代にも楽しく買われている“個食”

この取材をはじめの前には、当初、独身のOLやサラリーマンなど、単身世帯者が多い福岡市（全世帯の4割を占め、単身世帯比率は東京都区部と同じ）を狙ったマーケットなのかと思ったが、実際には親元から通うOLや、主婦が何かの集まりでの準備などでも楽しく買っており、小分けにされたお惣菜は幅広く市場に受け入れられている。単身世帯に限らず、家族団らんの生活をして、家を一步出た段階でみな“個族”ということになるのだろうか。

数多いメニューを前に自分だけが今食べたいと思うメニューを主体的にコーディネートできて、老若男女問わず、体調に合わせて選べる点で、個別の人々のニーズにマッチしたということになるのかもしれない。例

えばダイエット中の女性でも、二日酔いのサラリーマンでもそれなりの献立を組み立てられる。

○広域的な商圈をみて、あえて“個食”を取り入れていない福岡三越

この取材の最後に、最も新しくオープンした福岡三越に行ってみた。ここでは平日の昼時なのに、博多大丸や岩田屋Zーサイドのように食料品売場には若いOLの姿が見られない。福岡三越には“個食”売場が今のところない。どちらかというと計り売りの惣菜が多く、高級料理店の惣菜コーナーでは、中高年の主婦の方が買い物をしている。

この個食を取り入れない理由について、福岡三越の渉外室の方に話をうかがってみた。すると「これは、フルレンジのターゲットを優先した結果です」といわれた。九州中の都市間輸送のバス交通拠点であるバスセンターから直接入店できることが、広域的な商圈の維持を可能にし、広い層に受け入れられるのではないかとみられている。逆にこれからターゲットを絞っていくという考えもあるようだ。三越グループ全体でみれば小さなパック入りのお惣菜については、全国各地でやっているためノウハウはあるという。今後はニーズや競合相手となる百貨店などの動きを睨みながら、新規参入を考えてみたいとのことであった。

（澤谷 真紀子）

スミわたる空の下、 炭焼きの煙はくすぶる

○3つの方法で炭焼き

福岡県宮田町に如来田という小さな集落がある。その瑞石寺というお寺の土地を借りて、炭焼きを行った。地元の「如来田の環境を守る会」とグラウンドワークトラスト研究会のメンバー、地元の小学校の5年生と先生たちなどを中心に約40名くらいが集まった。

炭焼きに先立って、昨年暮れに嘉穂町から炭焼きの経験者を呼んで夜なべ談義、2月には準備のためのワークショップを開いた。ワークショップの中で3グループに分かれて、「穴焼き法」「伏せ焼き法」「ブロック窯」とそれぞれ違う方法でやることに決定。どれも本格的な釜は作らずに簡易な装置で焼くやり方で、穴焼き法は地面に穴を掘って炭材を詰めトタンやおがくずで蓋をする方法、伏せ焼きは土を薄くはがして炭材



ブロック窯に炭材（樫の木）詰め込む。

を並べ上から土をかぶせる方法、ブロック窯はコンクリートブロックで簡単な釜を作る方法である。私はブロック窯のチームに入り（というか班長になり）、コンクリートブロックを買ってきて窯を作ることになった。

○本と見比べながら……

3月14日、15日の土・日に他のグループと一緒にお寺に泊まり込んで炭焼き作業を行った。今回の作業チームに炭焼き経験者はひとりもおらず、炭焼きの本を買ってきていい加減な図解を見ながら窯を作るという作業で、なかなか捗らなかった。初日は朝から地面を掘り始めて、昼過ぎにはブロック30個（1周10個×3段）を積み、夕方までには切ってきた樫の木を詰め込んで点火にこぎつけた。ひとしきり点火材に火がまわったところでトタンで蓋をして、竹の節を抜いた煙突と通気口を残して土で埋めた。

数時間後に煙の色が水蒸気の白から紫に変わって透明になったら煙突をはずして通気口もふさぐ、と本には書いてあったが、陽も落ちて煙の色も分からなくなり、夜の10時頃そろそろいいだろうという班長判断で穴を塞いだ。

次の日の昼にあらためて子供たちも集まり、まだ暖かい窯の土を除けてトタンの蓋を開けてみると……、樫の木は全くの生焼けで、タールで表面が黒くなっただけだった。他のグループは、伏せ焼きが3分の1位が硬い炭になり一応成功、穴焼きは生焼けだった。

ブロック窯と穴焼きグループは、まず火が通るのが先決ということで、生焼けの炭材をまた燃やし、消し炭のように脆い炭になってもいいという覚悟で燃え上がるのを待ち、再び蓋をして土で埋めて敗者復活戦に望んだ。

○失敗は成功の元

2週間後、予定では「出来た炭でバーベキューパーティーをしよう」というはずだったが、それほどの炭は出来なかったで、結局市販の木炭でバーベキューをすることになった。餅つきをやって焼いて食べる、魚を釣って焼いて食べる、お茶をわかしているいろんなお茶を楽しむ、というグループごとのイベントも市販の炭で行った。

その日、敗者復活戦の窯を開けてみると、ボロボロの炭のかけらと生焼けの樫の木の中に、きれいで硬い炭がいくつか出来ていた。失敗は成功の元。しかし、せっかく出来たその炭をバーベキューに使う気にはなれず、みんなで分けて記念に持って帰った。

○地域の産業づくりになるか

炭焼きをやる当初の目的は、如来田の環境を守る一環として炭を川に沈めて水を浄化すること、地区の農産物販売所に出せるような新たな商品と産業づくり、そして地域の子供たちに体験を通した環境教育をすることであった。産業づくりには少し遠いが、子供たちの体験と川の浄化には一役買えたのではないかと思う。

現在、炭焼き体験の横の土地に、耐火煉瓦を使った本格的炭焼き窯を手作りで建設中である。

（伊藤 聡）

ごみ問題を考える④

ごみ問題は「少子化問題」「個族化問題」

山のように詰まれた雑誌の中で生活している私にとって、家の中のごみ問題とどう戦うのか悩んでいた。子供会が回収をしていることは知っているが、どこで、いつ行っているのかわからない、小学校にリサイクルボックスが設置されていることも知ってはいるが、徒歩でこの量の雑誌類を持っていくのは、どうてい無理である。

ところが、1月22日付けの西日本新聞に、「進む福岡市の古紙回収」という見出しで、城南区と中央区春吉地区の古紙回収が紹介されていた。

さっそく取材を、と思い、福岡市に電話すると、「中央区役所に聞いて下さい」といわれた。中央区役所に電話すると、「春吉公民館に聞いて下さい」と電話番号を教えられ、春吉公民館に電話すると、「春吉の柴田さんに聞いて下さい」と言われ、「えっ！個人でやってる

の？」と驚きつつも（新聞記事では市側の協力要請云々とあったため）、柴田さんを紹介して貰い、やっとお話をうかがうことが出来た。以下は柴田さんのお話から。

○きっかけは昨年12月からの3分別回収

紙ごみの回収を行うきっかけとなったのは、昨年12月より実施された、3分別収集（可燃、不燃、粗大ごみ）について、福岡市に実施前に説明を聞きに行ったことであった。そこで、柴田さんを含めた町内の方は、「紙は可燃、プラスチックは可燃、等々」と分類方法の説明を受け、リサイクルできるものがあることを知った。リサイクルできるものは、リサイクルしようと思われ、市側が業者を選定するという形で協力した。

当初、市が選定した業者は、新聞、古紙、段ボールの3種しか集めないものであったため、再度、市に出向き、雑誌、チラシの回収も行う業者を再選定して貰った。

○子供会の回収だけでは足りないわけ

春吉地区では以前より、子供会による紙ごみの回収が行われていたが、柴田さんらがこの取り組みを行わなければならない理由があった。

福岡市の方はご存じだと思うが、春吉地区は福岡市の中心、天神の北西に接している都心であるため「少子化」の波をもちに受けている。そのため、子供会を組織する地区が少なく、子供会による回収の無い地区が多くを占めている。

また、単身者向けの住宅や、住民の流入の多い地区を含むため、子供会への協力、地域への協力の体制が希薄である。いわゆる「個族化」問題もある。

さらに、最近、地域の小学校に設置されている、リサイクルボックス等では、距離が遠くなるので高齢者が対応できないことも考えられ、回収場所として、数十ヶ所のポイントをおくことを当初から決めていた。

○紙ごみの日には朝6時から用意

回収日を「紙ごみの日」と呼んでいるのだが、柴田さんは、この「紙ごみの日」の当日は、朝6時から担当のポイント（3ヶ所、いずれも道路わき）に回収場を設け、7～9時の回収に備えている。

また、町内をまわり、ごみの出し方などで、わからないことがあると（例えば、福岡市では1回につき、1世帯1ごみ袋なのだが、町内清掃のごみはどうすればいいのか等）、市に聞きに行く等のお世話係を買って出ている。

ちなみに、柴田さんは市から任命された環境推進委員ではない。

最後に、今回の取材で感じたのは、ごみ問題は、地域問題であるから、地域を愛して、行動するキーマンと、協力体制が重要となってくるということだ。柴田さんは、周囲の人に「出る杭は打たれるっていうけど、出過ぎた杭は打たれないらしいよ」と言われている。

取材協力：福岡市環境推進委員 柴田 真紀子（澤谷 真紀子）

地域との交流を進める

元ハンセン病患者の療養所菊池恵楓園

熊本県合志町に「国立療養所菊池恵楓園」という、ハンセン病＝らい病患者の療養所があり、先日訪問した。ハンセン病は感染力の弱い慢性の感染症であるが、以前は伝染病や遺伝病と考えられ、社会から隔離され差別されてきた。現在ではすでに撲滅されたと言われており、かかったとしても薬で2～3日で治るようになっている。つまり、療養所にいる人はみんな元患者である。ただし薬ができる前に発病した人は手足や目、顔などに後遺症が残っている人も多い。

ハンセン病への偏見と差別の歴史は、強制隔離、不妊手術、親族への差別など激しいものであった。親族への差別を避けるために、名前を隠し、あるいは死んだものとして施設に入り、死後骨壺にも本名を記さなかった。平成8年、菅直人が厚生大臣の時に「らい予防法」が廃止され、入所者は隔離政策から解放されている。

恵楓園は全国に13ヶ所ある国立の療養所の中でも最も大きい。「らい予防に関する件」という法律が明治42年に施行された時に恵楓園の前身の施設が設立された。現在約780人が入所し、平均年齢は71.5歳と高齢化している。新しく施設に入る人はいないため、最も若い世代でも50歳代と徐々に高齢化が進み、亡くなることで人数が減少している。入所者数は昭和30年代に最も多く1,900人くらいいた。当時職員数は96人で約20人に1人くらいしかいなかったが、現在は780人に対し500人以上と、マンツーマンに近い職員数があり、国の療養所に対する扱いの違いが分かる。職員側の意識も、恵楓園へ派遣といわれると昔は公務員を辞める人もいたらしいが、今は環境も良く、偏見もほとんどなくなり、職員は喜んで来るようになったそうだ。

施設の面積は農地を含めて全部で66ha。住宅、病院、スーパー、理髪店、礼拝堂、公園などがある。以前は学校もあり、隔離された施設内で生活がほぼ完結するようひとつのまちになっていた。農地は以前は強制労働させるためにあったもので、ほとんど刑務所と同じ扱いだっただ。今は一部公園化され地域に開放しているのだが、施設入り口の道路脇に「〇〇恵楓園店→」というスーパーの看板があり、出入りを促すような雰囲気になっていた。

住宅は、健康状態のいい人には公営住宅によく似た長屋建ての住宅、健康状態の良くない人には介護等がしやすいように廊下のつながった住宅がある。どの家も庭があり、きれいな花をたくさん咲かせているところも多かった。

入所者は普段、午前中は主に健康管理で病院などで診察を受け、午後は趣味の時間として絵画、無線、囲碁・将棋など様々なサークルで過ごしている。

近況

100歳の誕生日に思う。

去る3月末の日曜日に、学生時代に、昼には造形、夜には鹿児島は天文館大学で教えてもらった柳田先生の百歳の誕生日を、教え子や関係者10人程度でお祝いをした。

昨年は白寿(99歳)ということで40数名が参加したのだが、今回はこじんまりとした会となった。

天文館公園のザビエル像、七高の記念碑は先生の作品である。

先生は60歳代の時に奥さんを亡くされ、それ以来40年近く独身である。ふるさとが小樽ということもあり身内とのつきあいはほとんどなく、身近な人とのつきあいでこれまで生きてこられている。今は少し足腰が弱くなったので、病院暮らしであるが、その面倒は市内の教え子(私の先輩の方)がみている。

先生は意識はしていなかったであろうが、結果的には長い時間をかけたつき合いやネットワークが、先生の一人暮らしを支えているようである。

蛇足であるが、この日先輩に連れていかれたあるスナックで飲んでいたら、一人で店に入ってきて豪快に

らい予防法廃止前後から由布園長を中心に地域との交流を進めるようになり、毎月4日には地域の人たちとゲートボールをしたり、小学校から音楽会に招待されたりしている。恵楓園は周辺に集落があり、交流は比較的しやすい(ただし、以前はこの立地条件が激しい差別のもとだった)。島にある療養所などでは、今でも施設外との交流が難しい所もあるようだ。

今は買い物に出ることも自由だし、社会復帰も出来るはずなのだが、高齢化が進んでいること、差別や偏見の意識が根強くあること、長い施設生活で能力が身につけられなかったことなどから施設にとどまっている人が多い。

ハンセン病については自分自身知っておきたいことだという認識はあったのだが、隔離されていたということ以外ほとんど何も知らなかった。今回グラウンドワークのメンバーの紹介で施設を訪問することができ、勉強するきっかけがつかめたように思う。(伊藤 聡)

70年代の歌を歌い、意気投合したお客さんがいた。

この人は列車の時間があるということで1時間ぐらいで店を出たのであるが、後でママさんは曰く「さっきの人は15代沈壽館なのよ。(現当主は14代)」といわれてびっくりしてしまった。今年は薩摩焼400年祭であり、再度薩摩焼きのふるさとである美山に行きたいと思っていたのであるが、また15代に会える楽しみができた。(覚えていないだろうが……)(山田 龍雄)

祖母の最後の仕事

先日、母方の祖母が亡くなり、お通夜とお葬式に出た。享年は90歳。戦時中は満州鉄道で働いていた夫(祖父)と大陸に渡り、戦争終了前に慌ただしく本土に戻り、戦後は佐賀、福岡の両県内で地縁、血縁を頼って移り住み、夫が早く亡くなった後に男2人、女5人の子供を女手ひとつで育てあげた。

お通夜、お葬式は太宰府市の斎場で行われ、親類一同が集まった。お通夜には私は遅い時間に到着したが、子の代で泣いている人はなく、孫の代も、私の従兄弟たちが連れてきた小さい曾孫達も泣いていない。

祖母が亡くなる前の数年間、子の代(私の母親の兄弟)は、つまらない感情のもつれから互いに疎遠になっており、なかなか従兄弟達と会える機会がなく、はっきりいって一族バラバラという感じでもあった。

祖母の最後の仕事だったのかもしれない。私は成長し巨大化した従兄弟達の様子に目を丸くし、久しぶりに会った叔父からは酒を注いでもらい、結婚を進められ、従兄弟達とは久しぶりにゆっくり語らうことができた。「ばあちゃんが最後に一族を結び付けたのかも…」と皆が同じ事をいっていた。

男性陣はみんなタイル張り職人という珍しい男性の一族の中であって、私唯一人が会社勤めという異端の存在である。サラリーマン仕事について質問責めに遭ってしまった。差し出された酒を飲み、食べ物を口にしながら、かつ、一人ひとりの質問にもちゃんと応えねばならない。久しぶりに会うと大忙しである。

火葬が済んでお葬式が終わったのち、子の代同士、孫の代同士で集まって何かやろうということになり、幹事を決めて持ち寄り式の会食を催すことになった。

孫、曾孫の代の集まりでは小さい子供が多いため、皆が楽しめるよう、あえて精進料理風にはしないという

取り決めにしたため、こんにゃくをいれたお好み焼、がんもどきをつかった焼き鳥風など、珍しい料理もでてきた。

生前、私にとって祖母は無口で少しおっかない感じがして近づきにくい存在であったが、母の話では祖母はまめな人で、特に料理や針仕事には精を出していたそう。やはり血筋なのか、私が毎年パーティーで出す地日本酒、白ビールなどは、祖母は戦後すぐ、佐賀にいた頃に作って村で売っていたこともある（違法であるが）らしい。子の代ではそんなことをする人は一人もいないから、私だけが祖母のそういう仕事を受け継いだことになる。

後日、初七日の集まりでは、形見分けとして、満州時代の写真や私の母の子供時代の写真など、祖母の思い出の品々が並べられた。セピア色の写真を眺めながら、孫の代、曾孫の代まで出席した一同、時代の匂いのようなものをかいだ。 (尾崎 正利)



「高蔵寺ニュータウン 夫婦物語」

はなこさんへ、「二人からの手紙」

津端 修一 / 津端 英子 著
ミネルヴァ書房 刊

自由時間評論家であり、高蔵寺ニュータウン計画の中心人物でもあった津端修一氏、そして自由時間・田舎暮らしのホームメーカーである英子婦人のとても素敵な人生を描いた一冊です。

副題にある「はなこさん」とは、津端夫妻のお孫さんで、この本は「おじいちゃま」「おばあちゃま」から愛する孫娘への手紙というスタイルで書かれています。

「おばあちゃまからの手紙」は、田舎暮らしに興味のある人、野菜作りに興味のある人は必見です。里山の段々畑300平方メートル、田圃を700平方メートルという敷地を借り、念願の田舎生活を実現した彼女の奮闘記が描かれています。彼女は無消毒、無農薬で作物を育てていました。ここで少し勉強になったことがあります。梅・杏・サクランボの木の下には一面にニラをまくと、その強烈なおいがアブラムシに効果を発揮すること、柿の下にミョウガを植えると虫避け効果

があること、スイカなどの瓜科の植物にはネギがいいことなど。無消毒、無農薬で農業を営むには一工夫が必要なんですね。

「はなこさん」が誕生してからはご夫妻、特に英子婦人の生活は「はなこさん」一色に染まっているように見えました。お孫さんに対する愛情が伝わってきます。

「おじいちゃまからの手紙」では彼の大好きなヨットについて描かれています。学生の頃から始めたヨットは公団に勤めてからも続き、土・日には決まってヨットになっていたそうです。やがて給料の一年分以上にもなるヨットを手に入れ、優雅に家族クルージングなどもしていました。

彼が中心になって携わった「高蔵寺ニュータウン計画」についても書かれています。1960年に始まったニュータウン計画で、当初、彼は町の外から計画に携わっていましたが、後に自らこのニュータウンに移り住むこととなります。彼は計画者としてではなく、一人の生活者として、自ら計画した町を内側から眺めその様子が書かれています。

この本を読んで感じられることは、夫妻はとても仲が良く、好きなことを思う存分楽しんでいて、いつも楽しそうだということです。私の人生はまだ先が長いですが、人が楽しんで聞いてくれるような人生を送りたいものです。 (小田 好一)

第6回よかネットパーティのご案内

人と人との交流の輪づくり“人もうけ”をする会として毎年開催しています「よかネットパーティ」も、今年で6回目をむかえることとなりました。今回は、持ち寄り参加型パーティを考えています。是非、食べ物、飲み物を御持参のうえご参加下さい。

なお、参加ご希望の方は、当事務所まで御連絡下さいますようお願い申し上げます。

日時：平成10年5月23日(土)

12:00~16:00

※時間内に自由におこしください

場所：警固神社境内 東側棟

福岡市中央区天神二丁目2-20

TEL: 092-771-8551

津端先生のこと

津端先生には、いつもよかネットを送る度にひと言ずつ手紙をいただいております。そういうこともあって、この図書紹介については、小田が読書感想を書き、糸乗が津端先生のことについて、「何かゴタクを並べろ」と編集担当者から言われたので、小田の書評読んでみたのだが、後半の“彼”が少々気になり、同時に次のことを思い出した。

20年ほど前に、河上肇の生誕100年の講演会があり、1人目の講師が若い人であり、2人目の講師が私の師匠である杉原四郎先生であった。

1人目の若い人は、「河上肇は……」と極めて歯切れよく話していたが、次に上った杉原先生はモタモタした話を始めた。

「実は、私は、河上肇を見たことがあるように思うのです。先程から聞いていると、河上肇と呼び捨てにして話しておられたのですが、私はそれほど歴史上の人物として客観視することができません。確か、昭和20年頃、百万辺から銀閣寺の間だったので、着物姿の河上先生を見かけたのです。といて、先生と呼ぶほどのかわりがあるわけではなく、直接教えていただいたわけでもなく、実は、今こまっているのです」というエピソード。

次は、本当のゴタク。御託を並べるとは、“新明解”によると、「くどくどと(偉そうに)自分勝手な言い分ばかり言う」となっている。以下は、その勝手な言い分。津端先生という人は、実に勝手な人である。

いつも、自分の思ったことをはっきり言う人だと思っている。思いこみのはげしい人でもある。思いこみだけでなく、それを現実にしてしまうぐらいの人である。これがこの本に書かれている物語だと思う。

先日、ある委員会で、「糸乗さんは勝手なことばかり言っている」と言われて面食らったことがある。

私などは、ずいぶん気を使って話をしているつもりなのだが、「その場に合わせることをしないで、思ったことをそのまま言っている」と言われてしまった。

津端先生の方が、はるかに上だと思っている。

以上、御託二題。失礼の段は平に御容赦を。

ところで、津端先生には長いことお会いしていない。一度お会いして、久しぶりに思いこみのはげしい話を聞きたいと思っている。(糸乗 貞喜)

編集後記

■高齢者のニードをとらえた、起業を考えてみようというグループを発足させました。年に一度の「高齢商品、サービス見本市」兼、「高齢者に特にサービスをするレジャー大会」といったようなことをやろうということです。「成算はあるのか」と言われて戸惑っていますが、「商品は優れている」、「社会的ニードは絶対にある」、「九州にとって極めて大切なこと」だと思っています。この起業が、できるかどうかは分かりませんが、チャレンジのつもりで「いっだしっぺ」になりました。次号に報告をのせます。(い)

よかネット NO.33 1998. 5

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130